

**柄井川柳** 前句付点者。自らは句作せず、狂歌に押されながらも付句集「柳多留」編纂を続けて、「川柳の祖」に。

からいせんりゅう

御蔭参流行・1718 = 宮侍であった祖父が寛永寺の院主になった法親王に従って江戸に下り、その末寺竜宝寺門前に住んでその周辺の名主となった家に生まれる。

・・・・・・1727 = **9歳**：

**享保大飢饉**・1732 = 14歳：

・・・・・・1733 = 15歳：友人に誘われて、吉原に行き、遊女から、江戸前句付け点者の第一人者といわれ、川柳の俳句作者収月の句を教えられる。

悪鋳再開・1736 = **18歳**：

**徳川吉宗隠居**1745 = **27歳**：

**徳川吉宗没**・1751 = 33歳：

**山脇東洋解剖**1754 = **36歳**：

自然真嘗道・1755 = 37歳：父が死去して、竜宝寺門前町などの名主を継ぐとともに、自由の身となり、

源内物産会・1757 = 39歳：収月が死去。**\*呉陵軒可有の骨折りで立机し、前句付点者を開業、**

**山手を中心地盤に、毎年8月から年末まで月並み興行。都会的俳諧的な句を採って人気を得、**

**大岡忠光没**・1760 = 42歳：

・・・・・・1762 = 44歳：神田明神の奉納句会で15000句を得るなど、江戸の第一人者となったが、

・・・・・・1763 = **45歳**：

蘭銭初輸入・1765 = 47歳：**\*彼の名を高めたのは可有が企画した高点付句集「柳多留」であった。独立詠としての川柳風狂句という新様式を生み、前句付点者川柳は、川柳風狂句の祖と仰がれることになる。**

**明和事件**・1767 = 49歳：九月に二万句を突破。「柳多留」二編刊行か。巻末に景物歌仙を付ける。

久留米藩工事1768 = 50歳：「柳多留」三編刊行。

・・・・・・1769 = 51歳：月例会以外に、初瀬連の五五の会が始まる。「柳多留」四編刊行。

・・・・・・1770 = 52歳：「柳多留」五編刊行。扉に組連名12を掲げる。

御蔭参流行・1771 = 53歳：「柳多留」六編刊行。扉に作者名32を掲げる。

**田沼意次老中**1772 = **54歳**：「柳多留」七編刊行。この頃から**狂歌に押され、**

大原騷動・1773 = 55歳：「柳多留」八編刊行。扉に各組の好士60名を掲げる。

解体新書・1774 = 56歳：「柳多留」九編刊行。奉納句会の勝句を発表。**最盛期を終わる。**

黄表紙始・1775 = 57歳：「柳多留」十編刊行。正月に花角力会を開き、その入選句を特別紹介するようになる。

雨月物語刊・1776 = 58歳：「柳多留」十一編刊行。

・・・・・・1777 = 59歳：「柳多留」十二編刊行。扉に25の組連を、その集句数でランク付け。

**船蝦夷来**1778 = 60歳：「柳多留」十三編刊行。扉に上位10組連名。

源内獄中死・1779 = 61歳：「柳多留」十四編刊行。

・・・・・・1780 = 62歳：「柳多留」十五編刊行。組連名16を掲げる。

・・・・・・1781 = **63歳**：「柳多留」十六編刊行。扉に川柳好物を示し、14の組連名を詠んだ句を並べる。

天明大飢饉始1782 = 64歳：「柳多留」十七編刊行。俳名入りの句が半数を占めるまでになる。

蘭学階梯・1783 = 65歳：「柳多留」十八編刊行。

田沼意次刺殺1784 = 66歳：「柳多留」十九編刊行。

蝦夷初調査・1785 = 67歳：「柳多留」二十編刊行。初めて雨譚が序を書く。

**田沼意次失脚**1786 = 68歳：「柳多留」二十一編刊行。巻頭に故人20名の句を並べて追悼。

寛政改革始・1787 = 69歳：休刊。

・・・・・・1788 = 70歳：「柳多留」二十二編刊行。**\*可有が死去して、中心人物を失い、**

初の横綱・1789 = 71歳：**\*「柳多留」二十三編刊行を最後に、川柳評終わり、**

異学の禁・1790 = **72歳**：**没した。**